

平成18年度

《第1回》

国語

時間50分; 100点満点

受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入してください。
2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。記入方法を誤ると得点になりません。
3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも提出してください。

郁文館中学校

— 次の文章を読んで、後の問題に答えなさい。

芸術について、一般にたいへんな見当ちがいをしています。今日、多くの人がほんとうに芸術だと思ひこんでいる、また創る側からも、「芸術」と称して、世間にはばをきかせているものほとんどが、じつは芸術ではないのです。

「それじゃあなんだ」とおっしゃるでしょう。それは「芸」とか、「芸」とかいうものにすぎないのです。私は芸術と芸というものをはっきりと区別しなければいけないと主張します。久しい以前から言っていることなのですが、なかなか徹底しないのが残念です。

この二つはちよつと同じように見えます。芸ってのは、芸術よりも術が少ないだけ、なにか芸術よりちよつと足りない、芸術の半分くらいなのが芸じゃないか、くらいに思っている人もあるかもしれませんが、そうではありません。この二つはまったく正反対のものです。その本質をこつちやにしては、絶対にいけないのです。では、どういうふうに違うのでしょうか。

芸術は創造です。これは、けつして「既成」の過多を写したり、同じことをくり返してはならないものです。他人のものはもちろんですし、たとえ自分自身の仕事でも、二度とくり返してはならない。昨日すでにやったことと同じようなことをやるのでは、意味がないのです。まえにもお話ししたように、美術史のページを開いてみてもわかることですが、エジプトから今日にいたるまで、ページを繰ってゆくにしたがって、芸術の形式はつきつぎに変わってゆきます。よかれあしかれ、けつして同じものが二度くり返されるといふことはありません。一枚一枚が新しく姿を変えています。(a)、芸術の技術は、つねに革新的に、永遠の創造として発展するのです。これが「芸術の本質」です。

ところで、芸とはどうでしょうか。これは芸術と「A」です。つねに古い型を受けつぎ、それをみがきにみがいて達するものなのです。芸術が過去をふり捨てて新しさに賭けてゆくのに、芸道はいくまでも保持しようとする傾向があります。何々流の開祖、家元というのがある、だれでもがそれと同じ型をまねて、その芸風が師匠に近くなればなるほど上達です。やがて「免許皆伝」「奥義のゆるし」となり、定められた形式のなかに完成をみるのです。

そんなことが芸術で考えられますか。ダ・ヴィンチの『モナ・リザ』とか、ピカソの『ゲルニカ』にそっくりまねた、寸分ちがわらない絵を描いたら絶対に失格してしまいます。このことはもちろん、疑いもなくおわかりになるでしょう。

(b)、じつさいには、この本質的な違いがあんがい理解されていないのです。日本画の絵かきさんなんか絵を描くところを見ますと、まず自分の尊敬する古今の大家の画集をいろいろ集め、それをかたわらに、ずらりと並べて、参考にして描いています。昔からの慣習です。また洋画のほうでさえ、私はこんな話を聞いたことがあります。ある有名画家Kから、ある人がフランスの画集を借りました。二、三週間してからその画家に会うと、「ああ、いいところで会った。あの画集をかえしてくれよ。そろそろ制作しなきゃいけないから」と、催促されたというのです。実話です。これを聞いて笑ってしまいました。こんなことがべつにおかしいとも思われていないらしいのです。芸と精神です。

(c)、芸とは、かならず家元制度というのがあります。これは同一の型をきわめて厳密に後世に伝えてゆく、たいへんな組織です。絵画の家元制度についてはすでにお話ししましたが、学問の世界にさえ、これがあったのはあきれるばかりです。だが、よく考えてみれば、今日なお、そのなごりがあるのです。学界のガンになっている学閥、派閥というヤツがそれです。

しかし、なんといっても、この遺風が典型的に保たれているのは、芸能の世界です。たとえば、長唄とか清元のお稽古などを見てもわかります。『鶴亀』だとか、『越後獅子』とかいうような古い唄を、くり返しくり返し何年もかかって、お師匠さんとまったく同じ節まわしで、うたえるようになるまで習いとするのです。「どうも、いつも同じでは退屈だ」と言って、オクターブあげてソプラノにしてみたり、あげるおもしろいところをおとしたり、ひっぱるところをシンコペーション(切分音)したりして、「このほうが気分も出ておもしろい」なんて言ったら、とたんにお師匠さんからどなりつけられてしまいます。それどころか、もう今日かぎり来なくてもよろしいと破門され、おもしろくない結果になることうけあいです。

こういうものは、お師匠さんのやるとおりをくり返して、その型を覚えることがたてまえなので、それからすこしでもはずれた歌い方をすれば、もちろんそれは、もうその流派のなかにはない。お師匠さんでさえ、家元でないかぎり、かつてに新しい面を開拓するなんてことは、許されないのです。どうしても芸術的良心があつて、おのれを貫きとおしたい人は、その流儀をはなれるほかはないわけです。そして何々流というのをべつにこしらえる。

だが、これは言うまでもなく、たいへんなことで、けつしてだれにでもできるというものではありません。すでに、かなりの地位と、あらゆる意味での力を持つていなければなりません。かつてはこのようにして、ときどき、独自の名人が出て分派を開いたこともあったのですが、しかし芸ごとの世界では、それもただちに固定してしまいます。家元制度というものは、その門下から新しい分派が出てくることをひじょうに警戒し、嫉妬ぶかく抑え、自流の世界を守ろうとするのです。そのためには、じつに周到でうまくできています。だから芸術の絶対条件である自由とか独創などを主張しようとしたら、ただちに食いつばぐれて、生活できなくなつてしまふわけです。

封建的な制度に窒息させられ、ギリギリ、縛りつけられて身動きがとれない、こんな土台からは、これからの芸術的發展などは、ぜつたいに望めません。

(岡本太郎『今日の芸術』より)

問一 二重線部1〜5の漢字の読み方を答えなさい。

問二 (a) (c) に入れる適当な言葉を次のア〜オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ言葉は二度使つてはいけません。

ア だから イ ところが ウ さらに エ つまり オ さて

問三 「A」に入れるのに適当な言葉を文中より三字で抜き出しなさい。

問四 傍線部1「芸術の本質」とありますが、この本質に当てはまるものを、次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 長唄 イ 茶道 ウ 清元 エ 絵画 オ 舞踊

問五 傍線部2「定められた形式のなかに完成をみる」とは、どのようなことですか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 芸ごとは、他人が創り出したものをまねることによってできあがるということ。
イ 芸ごとは、古い型を受けつぎ、それをみがくことによってできあがるということ。
ウ 芸ごとは、新しいものを創り出す作業をくり返すことによってできあがるということ。
エ 芸ごとは、古い型を受けつぎ、それに新たなものを加えてできあがるということ。

問六 傍線部3「この本質的な違いがあんがいに理解されていないのです」とあるが、筆者がこう判断する理由としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の尊敬する大家の作品を参考に描くことが昔からの慣習になっているから。
イ 自分の尊敬する画家の作品を参考にして制作しても、芸術として認められるから。
ウ 他の芸術家の作品をまねても芸術は成り立つと考える芸術家はいないから。
エ 他の芸術家の作品をまねることで創造しても芸術として評価されているから。

問七 傍線部4「この遺風」とは何ですか。文中より四字で抜き出しなさい。

問八

傍線部「しかし芸ごとの世界では、それもただちに固定してしまします」とありますが、その理由として、最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 芸ごとの世界では、流派の型を覚えることがたてまえになっているから。
- イ 芸ごとの世界では、流派の型をかつてに新しく変えることができないから。
- ウ 芸ごとの世界では、自由で独創的な新たな流派の型が次々とできてしまうから。
- エ 芸ごとの世界では、いろいろな流派の型を覚えることがたてまえになっているから。

問九

波線部に「『芸術』と称して、世間にはばをきかせているもの」とありますが、筆者があげているその一例について、「日本画」・「古今の大家の画集」という言葉を必ず使って、句読点とも二十字前後でまとめなさい。

問十

筆者の考え方と合わないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 芸術の本質とは、革新的に創造して発展するところにある。
- イ 芸ごとの本質は、過去を顧みて新たなものを創造するところにある。
- ウ 芸ごとは、封建的な制度があるかぎり、芸術的な発展はできない。
- エ 芸術と芸ごとは、はっきりと区別しなければならぬものである。

二、次の文を読み、後の問いに答えなさい。

ヒロちゃんの学校の行きかえりの道には、いろいろのお店がありました。一銭店といわれる子ども相手のおもちややあめなどを売っている店、材木を扱っている大きな店、着物や洋品を並べてあるきれいな店やいっぱい働く人のいる大きな店が並んでいました。

その並びのはずれの角に、ヒロちゃんが一番好きで、よく立ち寄るところがあります。薄暗い店の中に勢いよく真つ赤なほのおが、*ふいこの風にあおられて燃え上がる光景に、他の店にはない興味がわいてくるのでした。それ以上に心が引かれたのは、二人の職人さんが真つ赤に焼けた鉄を大きな槌と小さな槌で交互に打ち合うトン・テン・カンかまの音でした。

そこは、かじ屋さんでした。ふだんは、鎌かまや鉄てつなどを作っているのですが、ヒロちゃんが一番好きで楽しみにしているのは、馬がそこへやって来る時です。馬は、蹄鉄といわれるひづめに打つ鉄をかえにくるのです。その時のヒロちゃんは、(A)を皿のようにし、トン・テン・カンのリズムに酔ったり、馬の動きを見て楽しむのでした。

でも、一番の「カンシン」は、二人のかじ屋さんの動きでした。このかじ屋さんの主人は、五十歳すぎのじいと呼ばれている年寄り、もう一人はよその田舎から働きに来ていたさぶさんと呼ばれている人でした。じい、火に当たっているせいか赤茶色の顔をし、ごつごつの手や指が目立つ、大きな人でした。ふだんはやさしく「ヒロぼうきたか」と笑顔でムカえてくれたり、帰る時は「また、来いよ」と言ってくれるいい人でした。でも仕事になると人が変わったように、コワこわそうな顔で、大声を出してどなったりする時もありました。

もう一人のさぶさんは、いつもニコニコしていて、あまりしゃべらない若い人で、仕事場があいている時は、ふいごを押ししたり、引いたりさせてくれたり、コークスを入れさせてくれるやさしい人でした。この二人が(B)を合わせて鉄を打つ音は、トン・テン・カン、トン・テン・カンとヒロちゃんがつとりするほど快く心を打つのでした。ひづめのつけかえをすませて、パッカ、パッカと響かせて帰っていくお馬さんも「ありがとう」と言っているようでした。「さぶ、ありがとう、ご苦労さん」と言うじいのことばの中には、本当に信頼している職人の気持ちがいめられているように、ヒロちゃんは思うのでした。

しばらくして、また、じいの仕事場に寄りました。そうすると、いつもやさしいじいがおこった声

で「さぶが兵隊にとられた」とはき出すように言いました。小学四年生のヒロちゃんには、兵隊にとられたということの意味はよく分かりませんが、じいのおこった声やさみしそうな声から、²さぶさんがいなくなるということが何となく分かるような気がしました。

それから二、三日すると、かじ屋さんの前に近所の人たちが大勢集まって、さぶさんを送りました。じいは涙をこぼしでぬぐい「ぼんざい」と大声で叫びました。さぶさんは「行って参ります」と大声で言っつて別れを告げました。ヒロちゃんは、さぶさんについて駅まで行って見送りました。「ヒロちゃん、元気でな」と言っつて握手をして別れた時のぬくもりは、ヒロちゃんの涙の「アタタカさ」と一緒に残りいつまでも心に残っていました。トン・テン・カンの快い響きはしばらく、じいのかじ屋から消えてしまいました。

それから間もなく、じいの大きい声とトン・テン・カンの音が響いてきました。いや、ヒロちゃんの耳には、今までのトン・テン・カンと違って、とん・ちん・かん、とん・ちん・かんと聞こえてくるように思いました。それは新しく田舎からやっつて来たはじめての、ごろさんの鉄を打つ音が、じいと少しずつずれているためにおこるのだということがわかりました。ごろさんは、じいに「うすのろ、ばか」とどなられ、涙を流しながら槌を打ちおろすのでした。

ヒロちゃんも人の良さそうなごろさんを応援しました。でも、じいが認めていることが一つありました。それは、「ごろは、馬の扱いがうまいでな、どんな馬でもおとなしく蹄鉄をかえるだ」ということでした。ヒロちゃんもそのことがはつきり分かりました。どんな馬でも静かに脚を上げたり下げたりして、ごろさんのやることにシタガウのでした。

とん・ちん・かんの音が、だんだん、トン・テン・カンの音に変わるのにそう時間がかかりませんでした。涙を流しながらじいの言うことをしつかり聞いてがんばったからでしょう。ヒロちゃんは、やがてごろさんと仲良くなり、戦争も終わりました。でも、さぶさんは帰ってきませんでした。じいとさぶさんのトン・テン・カンの響きを、ヒロちゃんは二度と聞くことはありませんでした。

トン・テン・カンの音は、六十五年も前のことですが、今でもヒロの心に快く残っています。

(信濃毎日新聞「とん・ちん・かん、トン・テン・カン」より)

※ ふいご・・・金属の加工に用いる火力を強くするための送風装置。

問一 二重線部ア～オのカタカナを漢字に直して丁寧に書きなさい。

ア 目 イ 耳 ウ 手 エ 口 オ 音 カ 息

問二 () A・Bに入る最も適切な言葉をあとから選び、記号で答えなさい。

問三 傍線部1でヒロちゃんが「トン・テン・カン」という音に心が引かれる理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 蹄鉄をかえにやってくる馬の姿を見るのが楽しみだったから。

イ リズムに合わせて馬と一緒に酔うことができるから。

ウ さぶさんとじいの厚い信頼関係と二人の人間味が快く感じられるから。

エ 「トン・テン・カン」は昔なつかしい思いにさせてくれるから。

オ かじ屋さんは他の店とは違って、「トン・テン・カン」の音だけが魅力だから。

問四

傍線部2「さぶさんがいなくなる」とありますが、それによつてかじ屋からなくなったものは何ですか。十三字ちようどで抜き出しなさい。

問五

傍線部3「とん・ちん・かん」とありますが、「トン・テン・カン」と響かない理由がわかった時のヒロちゃんのごろさんに対する気持ちとして最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 上手なさぶさんとは大違いで、やっぱり下手なんだなと軽べつする気持ち。
- イ 音と同じで、「とん・ちん・かん」で頼りない人だなと残念に思う気持ち。
- ウ よくよく観察してみると、初心者にしては上手だなと見直したくなる気持ち。
- エ 早く仕事に慣れて、さぶさんのように頑張っつてほしいと励ます気持ち。
- オ やっぱり私はさぶさんの方が好きで、ごろさんを嫌いに思う気持ち。

問六

傍線部4「うす、のろ、ばか」から分かるじいのごろさんに対する気持ちとして最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 仕事に対して厳しいが、何とか一人前になるように努力してもらいたいと願っている。
- イ 仕事に対して厳しいが、まあはじめだから大目に見ようとしている。
- ウ 仕事に対して厳しく、人並みに出来ないならやめてもらってもいいと思っている。
- エ 仕事に対して厳しく、さぶさんに比べ役に立たない男だと軽べつしている。
- オ 仕事に対して厳しく、仕事の足手まといになり、邪魔もの扱いしている。

問七

傍線部5「戦争」について、次の各問いに答えなさい。

- (1) 戦争が行われていることがわかる表現を本文中より七字で抜き出さない。
- (2) 戦争に対する悲痛な思いが最もよく表れている一文を本文中より抜き出し、その初めの五字を答えなさい。(句読点・符号は含まない)

問八

本文の内容に合っているものには○を、異なるものには×をつけて答えなさい。

- 1 さぶさんは、笑顔を絶やさない、あまり話をしない、どちらかといえば無口な若い人である。
- 2 さぶさんもごろさんも、田舎出身者である。
- 3 さぶさんがいなくなっても、ごろさんが来たことでじいはいはうれしく思っている。
- 4 ごろさんは当初鉄を打つことも馬を扱うこともうまくできなかった。
- 5 ヒロちゃんはさぶさんとは仲良くできたが、ごろさんとはうまくいかなかった。